

酒場にて

ないしよにて語る人を見て

我が事かなど耳をすませし。

酒場にて

何も食はずに三本の煙草くゆらし

話にきゝゐる。

ゆ
か
た

いともきらひし着物なれど
今年はなつかしきみをおぼゆ
白きゆかたに。

取出せしゆかたにかほる
樟腦のほひもうれし
初夏の夜。

誓
ひ
し
友

聞くたびに我はおそれし友なれど

死にてときよて

我れはさびしも！

その昔共に語りし

彼の君は如何にますらん

月はくもれど。

あふ度にうれひのみつといひし友

秋風と共に

行方知れずも。

朝な朝な

我れと語りし友のはや一年はなれて
死にし悲しみ。

亡き友に

何か記念をと思ひ立ち

涙をそよぎ夜をあかしき。

戀などはせぬぞと誓ひし

あの友の、見出来しとき
昔を思ふ。

血

潮

たえかねて

なれもなくのやほととぎす

消えいるまぢに血潮しほりて。

わかれては又もあひ見ん時もがな

ことづてあらば

一文たまへ。

いざ行くか

何はなくとも我が涙

はなむけせんと雨のことおつ。」

たちかへり又も来て見よ

我が部屋に我れと語りし

彼の夜思ひて。

あふからにかねてわかれのをしき哉

燃えし心の

きえもはてぬに。

ほ
が
ら

五月雨のをやみし時に

音もなく

しめりし土におつる柿の實。

花に似ていつか素顔となりにけり

只花に似て

君のあらざる。

はてしなく続く

青葉の只中に獨り

いこひて深呼吸する。

五月雨のをやみし時に

ゆあみするおゆに

ゆらく月かけ動く。

あざやかに青葉となりし大えの木

雨晴れの空に

くつきりとたつ。

廣き野に

雨後の涼しき風吹けり

ひとり佇み口笛をふく。

若葉せしポプラの下に佇みて

風にさゆらぐ

若葉をみつむ。

雨晴れの夕陽

ほがらに沈む時

櫻の若葉に緑色そふ。

はてしなくつどく

大空眺むれば涙ぐましく

うれひのまさる。

うれひあれど

青葉の中にたゝずめば氣のはれやかに

心燃えゆく。

螢

火

五月雨のおやみし空に

青々と月の出できて

われをほゝえむ。

かやりたきて我は

夕をたのしめど

蚊のみは我を如何に思はん。

今とりし鮎の魚を

手料理して君と語らん

此の夜短く。

あつくらと白きむなげをそよがせて

つばめさけべり

かすめるあした。

消えつ又ひかりつ消えつ

夕やみにかげなくなりし

ほたるおもほゆ。

それそこに

それあそこにと友のいふ

螢は我れにはかなきものぞ。

我れひとり卓にむかひて

夕食をたべにし時に

夕顔の咲く。

電燈のひかりみなぎる部屋に

我れ戀文かきて

ほととぎすきく。

夕やみのをぐらき中に

花を見て友は叫べり

夕顔の花。

しつとりとぬれしおしめを

竿にさしはれゆく空を

母はみあげつ。

くろきまで緑になりし大櫃

風にゆられて

緑したる。

木の下に立ちて仰げば

高々と青桐の木の

大空に立つ。

若葉せし山のふもとの

一家なるきこりの家に

煙たなびく。

なくがごとむせぶが如き

五月雨のいつしかはれて

つばめとびかふ。

たらのぼる煙にむせびて

よみさしの書物の上に

ほとと蚊のおつ。

虹

夕立のすぎたる空に
七色の虹の出で来て
子供等さけぶ。

いと軽く葉中を歩む
女學生姿の消えて
我れはさびしき。

春日なる廣き大野に

さまよへるめじか雄鹿を

我れかぞへみぬ。

散りそめて

まだ二た日とはたゝぬまに

はや葉ざくらとなりけるかも。

かりそめの病に

一日こもりつゝ

青葉にそゝぐ五月雨ぞ見る。

春雨にかすめる

ちまたに六つ五つうき繪の如く

人の歩みす。

停車場の赤と青との

ともしびが葉櫻のかけゆ

見えすきしかも。

五月雨のおやみし時に

庭に出で

つゆにぬれにしあやめぞ手折る。一

戀人の又もくるよな心地して

耳をすませば

五月雨音す。

ふれよかし

あすもふれふれ五月雨よ

うとしき我れのはるゝまでふれ。

花

衣

亂れ散る木の下かげにかりねして

花の衣を

我れは着にけり。

手も足も鼻も口もに櫻花

我れいこひせば

所きらはず。

雲井までのぼりて

叫ぶひばり等は

如何に心のどかならん。

山里のあれしいほりの軒端にも

つばめとびきて

春をつげけり。

一しきりなきて

やみにし蛙等の聲さへかすむ

五月雨の夜。

花も人も亂れ亂れになりし時

われはさびしく

長堤歩む。

花咲きてのどかになりぬと

告げぬ友なでに出で來と

我れにはつけぬ。

ふみわけて誰かとはなん

我がいほの櫻は

今を盛りに咲くも。

あさがすみ

春の山邊をたちこめて

野山の雪はいつか消えけり。

ひとりにて庭に出で行き

月見れば

君が似顔の月の面にみゆ。

葉と幹といづれか青き

すく／＼と中空に立つ

青桐の木は。

おどろ／＼空行く

雲を眺むれば

又雨かとぞ心わびしも。

さ
す
ら
ひ

旅に出て

音信ヲヨリを書かんと思ひしに

旅のつかれに我はさびしも。

一杯の飯を

十五分かけて食ひ

なが生きすなど笑ひて喜ぶ。

旅に出て十日の病に

我が家の

泣くが如くに慕はしき哉。

金もなし

智もなき我れのさすらひよ

疲^ツ勞れと命、日毎にあぼゆ。

さすらひの友を慕ひて

我も亦さすらひにけり

東海の磯。

ふるさとの

母のみこひしき日あり、

父のみこひしき日もあり、旅のあはれさ。

旅立ちてはや二年は経ぬれども

よへもこよひも

母のみ思ふ。

は
ら
か
ら

はらからとわかれて

悲しき六年をば

我れ紀念すと神に祈りし。

はらからが大きくなりて

世の中に何をなすらん

我はいためど。

いさゝかの金に困りて

金かせと

姉にあてたる手紙のかなし。

滅び行く我が家のみ名残りあり

かたみの裏山、

手植の紅葉。

理由なく滅び行く

我が家にあきたらす思へば

昔なつかし。

時

雨

さら／＼と音して通る

時雨シツレにも聲ありときく

山家の我れ。

ほと消えてをぐらくなりし

部屋にわれ夢をたどりて

あかりともさず。

六疊の部屋の真中の青白き

電燈きえて

ひとりかりねす。

いともわれ世をはかなみて

今も亦机にもたれ

さめぐとなく。

月によき書齋にありて

君と我が月みつつ語る

此の夜あけそね。

水清き川の瀬波に

浮ぶ月、千々にくだけつ

千々に消え行く。

夜毎わがねむりをさます
ふくらうのさびしき聲に
ひとりなきいる。

時雨かと思ひし雨は

いつかはれ

夕陽をあびて虹の出でにき。

夜毎わがねむりをさます
宿なしの猫のなきごえ
又もきこへつ。

こよひ又夢に入りにし
我が母は弟を抱きて
いかにいぬらん。

びんのほつれ

燃えし火の

いつか消え行く夜更けまで

君の心を我れきかめやも。

戀人のびんのほつれを

かきあげて我はほゝ笑む

野路の夕に。

子供等がいつしよになりて

さすらひの唄歌ふなり

秋の夕に。

とんぼとんぼとまれよとんぼ

子供等が捕りに來たらば

高く逃げ行け。

朝ぎりの深くとさせる庭に

我れ水をふくみて

心ゆたけし。

ほととびて

森の彼方にきえいりし星の光りの

あへなきものよ。

もみぢせる太き銀杏に

夕日さし

黄金の如く中空にたつ。

居眠れる我が戀人を

前にして我はもの思ひつ

宵の炬燵に。

泣きて

我が顔を眺めし戀人の赤き顔にも

笑のたゞよふ。

ほのくくとあけ行く空に

富士がねの高くゆたけき姿

あらはる。

た
れ
ほ

おやみなく降りし五月雨

いつかはれ

おどろくゝに雲の歩みす。

雨やみて

空の一所あかるめば

子等は出でゆき水溜りに入る。

うちなびくたれほの上に

むら雀、さはぎし後に

あはれさびしも。

松が枝に馬をつなぎて

晝寝する馬子の心や

のどかなるらん。

初

秋

初秋に

さら／＼と吹く風を

さびしきものと夜もすがらきく。

秋風になびく木の間の絶え間より

見えかくれする

空の青さよ！

肌ざはりよき心よと思ひしに

電車とまりて

彼の君まゐる。

すつきりと戸をもる

月の光りにも

秋の感じは鮮やかなりけり。

病のをりに

夜となれば晝のこひしく
晝となれば夜のみこひしき
病みふす我れは。

眞夜中に

とくる氷の音きゝて

死に行くとのみ心いらだつ。

苦しきのまさりし時に

我れは又死を思ひつゝ

心いらだつ。

熱のためめざめしわれは

又も亦死のみ思ひて

心わびしき。

苦しきのまさりし時に

我は只念佛となへ

平癒をいのる。

立ちさはぐ胸の鼓動を沈めんと

苦ニガき薬を

ぐつとのみほす。

うれひのみまさりし時に
我れはしも死のみ思ひて
心なぐさむ。

死を仰ぎ

さて死をのぞみし昨日の我れ
病のませば心いらだつ。

手も足も動けぬ我は
ちつとして、みつむともなく
天井みつむる。

病む床に身をも心もおきなやみ
只ひたすらに死をぞ
待ちわぶ。

夜の更けて

はかなき思ひに又も

我れ身をふるはして泣き叫びしも。

274

我が戀ふる彼の女の君の

愛も得で我れ死ぬるやと

うれひのつる。

275

君のいふ戀といふ字を

思ひ見て又泣きにけり

病む夕にも。

か
ひ
な

ほつそりとほそりしかひなに
くちづけし君の名よびて
ひとりほゝえむ。

細りゆく白きかひなをみつめては
涙ぐましく

心の滅入る。

惡
血

惡血之由來
血之運行
血之虧損
血之凝滯
血之燥熱
血之虛弱

病みつかれ

さてねつかれし^{からだ}身體にも

悪魔の如き血潮みなぎる。

二人して語りし夕

其の夕只なつかしく

又の夕をまつ。

死は常に我れをおそへど
死は常に我れをおそれて
我れ死にもせず。

大正十五年三月二十日印刷
大正十五年三月廿五日發行

版權所有

定價金 壹圓

著者 綿貫恒作
埼玉縣浦和町一六六ノ二

發行者 下中 綠
東京市神田區錦町三ノ三

印刷者 志賀主殿
東京市神田區三河町三ノ六

株式會社 平凡社
東京市神田區錦町三ノ三
振替東京二九六三九番

大取次

東京 東京堂
海堂 大坂
九州 菊竹書店
北隆館 柳原書店
大坪書店 栗田書店
文行社 川瀬書店
名古屋

終

